様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２９９４

研究課題名（和文）英語による対話力向上をめざすアジア圏異文化交流のアセスメント

研究課題名（英文）The assessment of educational exchanges among Asian youth: focusing on the development of intercultural communication competence using English

研究代表者
八島　智子（Yashima, Tomoko）

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：６０２１０２３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アジアへのスタディ・アブロードに参加した英語専攻の大学生を対象に、留学中に質問紙調査、帰国後の面接調査を行った。言語使用状況については、台湾に留学した学生の英語、中国語の使用割合が極めて多く、常時３言語を使う多言語環境に身を置いていることが示された。友人ネットワーク調査からは、多文化背景を持った友人を形成していることが示された。また、英語・中国語の動機づけは、留学期間通して高く維持され、言語への自信やWillingness to Communicateも高まっている。また多様な文化背景を持つ友人と第２・第３言語を駆使して対話を行う、多言語使用コミュニティが生成されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、アジア圏で英語・中国語を同時に学習するというプログラムの効果について、外国語教育学および異文化間コミュニケーション学の視点から分析した。ヨーロッパでは先行研究があるものの、第２第３言語の同時習得やその動機付けに関する研究はアジア圏ではほとんど行われていない。この意味で先駆的である。留学先で非英語母語話者同士でコミュニケーションを行うコミュニティの生成が確認され、アジアへの留学という経験が、英語を含む多言語使用を活発にし、グローバルな課題に向き合う多文化対応力を養う上で重要な経験であることを確認できた。また、本研究を通して現象の複雑さとダイミクスを捉える研究法の開発を行った。

研究成果の概要（英文）：Focusing on Japanese students’ study abroad experience in Asian countries, this study administered on-line questionnaires during their stay in Taiwan and conducted interviews after they returned to Japan. Regarding language use profiles during study abroad, we found that a proportion of Japanese used in communication in different contexts is much lower than those of English and Chinese(their L2 and L3). This means that students were placed in situations where they constantly use multiple languages. A social net-work survey indicated that they have made multinational friends including Taiwanese. Further, we found that their motivation to study English and Chinese was maintained at a high level for 10 months, and their confidence and Willingness to Communicate in the two languages have heightened. We also found that they joined communities where they can interact with diverse partners using the two foreign languages.

研究分野：応用言語学

キーワード：英語による対話力　多言語同時学習　異文化接触　言語学習動機づけ　コミュニケーションの積極性　多文化コミュニティ　混合研究法　複雑性とダイナミクス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

グローバル化する社会では、一国では処理できない多くの問題を、多様な背景を持った人と協働で解決していくことが必要となる。そのためには、諸外国の事情に通じ多様性を受け入れることのできる人材、英語で自らの意見を述べ、見解の違いを調整することのできる人材の育成が課題である。この目的のためにスタディ・アブロードなどの教育的な異文化交流の意義はますます高まっている。これまではスタディ・アブロードといえば、西洋の言語や文化を学びに行く（例：英語の習得を主目的に英米でホームステイをする）というのが主流であったが、最近では、単に一方的に学ぶ側という立場でなく、対等の貢献が求められるような参加形態が増えつつある。例えば、ボランティア活動などの国際協働学習や、台湾や韓国などアジア圏での異文化交流を通して、相互の言語文化を学ぶと同時に互いに英語のコミュニケーション能力を育成する試みがそれである。本研究では、このようなアジア圏で行われるプロジェクトについて、その効果を、外国語教育学、および異文化間コミュニケーション学の視点から分析する。

アジアに注目するのは、日本の若者が近隣諸国の若者と豊富な対話をもち相互理解を深めることがますます重要になると考えるからである。これまでに国際ボランティアに参加した日本人の若者を対象に行った研究で、英語力・知識の不足、消極性、英語使用に対する自信のなさなどが原因で、国際的な協働の場で議論に十全に参加できていない様子が浮彫りにされている（Yashima, 2010;八島, 2016）。英語母語話者ではない者同士が英語を国際語として使う場面が増えているなかで、非母語話者同士だからこそ英語を使うことにより積極的になる可能性もある。こういう意味でも、アジアでの教育的異文化交流を通して日本の若者がどう変化するのか、積極的に英語でコミュニケーションを図り、異文化背景を持った人と対話を通して協力し、グローバルな課題に向き合う力を養えるのか、という研究課題は極めて重要と考える

２．研究の目的

グローバルな人材養成の必要性が叫ばれるなかで、スタディ・アブロードなど異文化接触を創出する教育的な試みが盛んに行われ、その形態は多様化している。しかし、多様化する異文化交流の効果については、まだ系統だった研究が行われていない。本研究では、特にアジア圏での教育的交流に注目し、英語と現地の言語文化を同時に学ぶというプログラムを通して、１）英語での対話力（英語コミュニケーションの技術面・心理面）が変化するか、２）第２言語（英語）、第３言語（現地の言語）を駆使したコミュニケーションを通して、言語コミュニケーション能力・異文化対応力に影響があるかについて調査し、さらに３）異文化接触が心理的変化を起こすプロセスに注目し、良い変化をもたらすプログラムのあり方について提案する。当初の具体的な研究課題は以下のとおりである。

（１）アジア圏でのスタディ・アブロードなど異文化交流を通して、英語での対話力（対話を通して相互理解を深める力、議論する力）、コミュニケーションの心理面（特にWillingness to communicate、英語使用に対する自信・不安）、及び現地の言語の習熟度・文化の理解度の変化を明らかにする。

（２）異文化交流が若者の異文化対応力に与える影響について、態度・情意・行動の変化の様相を主に質的に明らかにする。具体的には、異文化への態度、国際的志向性、自己効力感、対人関係を築く技術などの変化について、混合法（量的方法・質的方法の融合）を用いて調査する。

（３）個別の参加者が、多文化背景をもった同年代の若者との交流を通して、どのように心理的

変容がもたらされるのかについて、そのプロセスを精緻な質的方法を用いて明らかにする。
（４）以上の述べた複雑な変化の様相を明らかにするための方法論の開発・探究を行う。

３．研究の方法

アジア圏において実施される長期の教育プログラム参加者を対象に、以下の要領でデータ収集と解析を行う。

データ収集１：具体的には 2018 年に台湾における（英語と中国語を同時に学ぶ）スタディ・アブロードに参加した英語専攻の大学生を対象に、中間時点の 7 月と終了時の 12 月の２回、メールによる質問紙調査を行った。内容は、

１）英語・中国語使用状況調査 (場面別に使用する言語とその時間を詳細に尋ねるもの)
２）友人ネットワーク調査（台湾で出会った友人の属性、使用言語・活動内容など）
３）英語・中国語の学習意欲（動機づけ）について、10 ヶ月間の変化
４）英語・中国語を話す自信、を尋ねるものである。

上記に加え 2019 年に、同意した若干名の男子学生に対し、スタディ・アブロードから帰国後にインタビューを行い、心理的変化をもたらしたと考えられる経験の内容、友人との関係性、それと使用言語の関係などについて分析した。

データ取集２：研究協力者が中心となった調査で、留学中に台湾に赴き、３人の女子学生に対し、英語・中国語の使用状況、動機付けの変化や友人との関係、その他留学経験全般についてインタビュー調査を行った。また、英語授業の視察も行った。これは留学前後に渡る長期的データの一環として集められたものである。

分析方法：量的データについては、変化の傾向を見ると同時に、全体的な傾向を見る。友人ネットワークについては、記述が多様であるため、その実態については、友人の種類や活動内容や使用言語などについて質的な分析を行う。インタビューデータは、書き起こし、コード化した上で、析出したカテゴリーを用いて、ストーリーを再構成し、参加者の三言語使用とそのコンテキスト、英語中国語の学習動機付けや使う自信の変化についてナレーティブを提示する。

新型コロナの影響で多くのスタディ・アブロードが中止になり、当初予定していたデータ収集が困難になる中、台湾中心のデータ収集と留学経験やその時々の心理の変化を分析する方法の研究開発に力を注いだ。時間軸を用いた分析、複雑系の考え方を取り入れた分析などを駆使することで、少数の参加者を対象により深い理解に到達することを目指したからである。次の研究成果においては、そのような新たな研究方法の可能性についても述べる

４．研究成果

（１）　留学中の言語使用状況について

過去１～２ヶ月を振り返り、種々の場面において、英語・中国語・日本語のどの言語を使うか一週間あたりの量を分で記入した。下の表は７月時点での平均値（N=7 名）である。

表１　留学中間時点での場面別言語使用状況（単位：分　小数点第一位四捨五入）

使用状況	英語	中国語	日本語
授業の宿題をするのに書く	76	222	0
テレビやネット上のドラマやニュースを見る（聞く）	110	113	53
ネット上のニュースなどを読む	17	2	68

ライン WhatsApp などでやり取りをする	115	135	150
先生や大学関係者と話す	97	480	0
友人と話す	287	367	180
自分の好きな本や雑誌を読む	21	20	0

１２月時点のデータは回答者が異なっていたため７月と直接比較することができなかった。しかし表１からわかるように、留学の中間時点において、日本語はネット上のニュースを読んだり、SNS でのやり取りをする以外は使用量がかなり少なく、英語・中国語の使用量がはるかに多いことがわかる。留学の前半に中国を、後半に英語を集中的に学ぶプログラムであったため、４ヶ月が経過した７月時点に置いて、宿題や先生と話すのは中国語が多くなっている。一方、友人との会話では、一週間に英語は５時間近く、中国語では６時間も話している。これについては、親しくしている友人の国籍などによって、個人差が極めて大きいことが窺えるが、台湾に留学した学生が、常時３言語を使う多言語環境に身を置いていることがわかる。

友人ネットワーク調査においては、友人について最高７名まで記述してもらったが、７月時点で参加者があげた国籍は、多い順に、台湾、米国、フランス、ついで韓国、シンガポール、日本が 2 名ずつ、インドやインドネシアを挙げた学生もおり、現地の台湾人だけでなく、多様な友人を形成していることが明らかとなった。

（２）英語、中国語の学習動機付けなど情意的変化について

質問紙調査内の自己申告による、学習意欲の変化について参加者の平均値を示したのが図１である。中国語の学習意欲は、10 ヶ月を通して高く、最高点である 10 ポイントに近い値を維持している。一方、英語は、中国語と比べると少し低めであるが、8～9 月を除いて８ポイント前後の平均値を維持している。中国語については現地語であるということで、意欲が続くが、英語については、夏休みに入り、授業がなくなると意欲は低下する。しかし英語の授業が多くなる後半にはまた回復していることが読み取れる。

図１ 留学中の英語・中国語学習意欲の調査

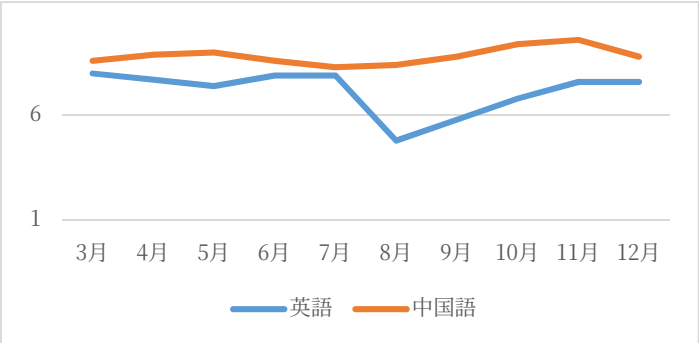
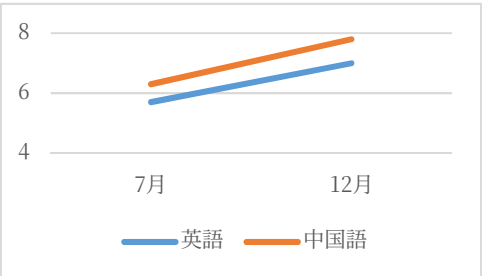


図２　英語・中国語に対する自信の変化



また、７月と１２月の２回、それぞれの言語でコミュニケーションをする自信の度合いを尋ねたところ、10 ポイント満点の評価で、中国語は 6.3 から 7.8 に、英語は 5.7 から７ポイントへ、どちらも上昇し、自信を高めている（図２）。

（３）面接調査　－２言語学習をめぐる複雑さとダイナミクス－

留学後に行った面接では、言語使用状況や友人形成と関係性、生活状況などを、複雑性の考え方に基づき、複数の時間軸も取り入れて質的に分析した。ここでは２名の男子学生（学生 A，B）を例に取り、結果の一部を呈示する。学生 A は、当初日本人の仲間と日本語のみを使って生活していたが、台湾系アメリカ人と韓国人の友人を持つに至り、英語使用量が極めて多くなる。特に韓国人とは友好を深め、毎日長時間話すことにより、英語で自然にコミュニケーションができるようになった。一方、第３言語の中国語については、授業での学習が中心であったが、留学後半には、自ら外に出て実際に使う努力をするようになる。言語能力の限界を感じながらも、中国語を対面での交流に積極的に用い、言語文化に浸ろうとする。一方学生 B は、留学当初からほとんどの時間、英語と中国語を使っていたため「日本語を忘れた」と述べている。彼の最も親しい友人はフィリピン系の台湾人である。主に中国語で話し、通じなくなると英語に切り替えたという。また英語で議論し、社交では中国語を使うというコミュニティに参加し、疲れるほど外国語で話し続けるという経験をする。その一方、しっかりと学習しようとすると、２言語同時学習の負担が大きく、難しいことについても述べている。彼は、中国語の学習意欲を高く維持し、日本に帰国後、専攻を中国語に変えている。（以上について詳しくは Humphries & Yashima，2021 参照）

留学中に研究協力者がインタビューをした女子学生 3 名の語りについても、上記と多くの面で共通することが報告されている（詳しくは Fukui & Yashima，2021）。多様な文化背景を持つ友人を作り、その相手と英語・中国語を駆使してコミュニケーションを行っていること、現地コミュニティへの参加は難しいものの、留学生のコミュニティへの参加を通して、多言語使用の場が生まれること、多くの学生が２言語同時学習の難しさや苦労を報告していることである。

以上、述べてきたように、台湾への留学では、アジア諸国から中国語を学びにきた若者との交流が盛んである。非英語母語話者同士だからこそ、英語さらには中国語を積極的に使う様子が確認され、異文化への意識や多言語使用者としてのアイデンティティの変化も見られる。アジアへの留学という経験が、英語を含む多言語使用経験であり、異文化コミュニケーションと多文化理解への道を開く経験であることがデータから読み取れる。本研究では、異文化背景を持った人と対話を通して協力し、グローバルな課題に向き合う力を養う上で重要な経験であることを確認できた。またそのプロセスを明らかにする方法論についても模索し、一定の成果が得られた。

＜引用文献＞

Fukui, H. & Yashima, T. (2021). Exploring evolving motivation to learn two languages simultaneously in a study-abroad context. *The Modern Language Journal*, 105, 267-293.

Humphries, S. & Yashima, T. (2021). “I forgot the language” : Japanese students’ actual multilingual selves and translanguaging challenges as English majors in Taiwan. In W. Tsou & Baker (Eds.), English-medium instruction translanguaging practices in Asia: Theories, framework and implementation in higher education. (pp.143-162). Singapore: Springer.

Yashima, T. (2010). The effects of international volunteer work experiences on intercultural competence of Japanese youth. *International Journal of Intercultural Relations*, 34, 268-282.

八島智子(2016).「国際協同プロジェクト参加を通しての「学びの質」」『関西大学外国語学部紀要』15, 33-50.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Toyoda, J., Yashima, T. & Aubrey, S.	４．巻 65
２．論文標題 Enhancing situational willingness to communicate in novice EFL learners through task-based learning.	５．発行年 2021年
３．雑誌名 JALT Journal	６．最初と最後の頁 107-024
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTJJ43.2-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Roever, C., Higuchi, Y., Sasaki, M. Yashima, T., & Nakamuro, M.	４．巻 online
２．論文標題 Validating a test of L2 routine formulae to detect pragmatics in stays abroad.	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Applied Pragmatics.	６．最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4324/9780429321498-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Fukui, H. & Yashima, T.	４．巻 105
２．論文標題 Exploring evolving motivation to learn two languages simultaneously in a study-abroad context.	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The Modern Language Journal	６．最初と最後の頁 267-293
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/modl.12695	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yashima, T., MacIntyre, P. & Ikeda, M	４．巻 22
２．論文標題 Situated willingness to communicate in an L2: Interplay of individual characteristics and context.	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Language Teaching Research	６．最初と最後の頁 115―137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/1362168816657851	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Nishida, R. & Yashima, T.	4．巻 28
2．論文標題 Language proficiency, motivation and affect among Japanese University EFL learners focusing on early language learning experience.	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Annual Review of English Language Education in Japan	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yashima, T., Nishida, R., & Mizumoto, A.	4．巻 101
2．論文標題 Influence of learner beliefs and gender on the motivating power of L2 Selves.	5．発行年 2017年
3．雑誌名 The Modern Language Journal	6．最初と最後の頁 691-711
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/modl.12430	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　5件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 Humphries, S. & Yashima, T
2．発表標題 Japanese students’ English and Chinese translanguaging in Taiwan.
3．学会等名 JALT 2021, 47th Annual International conference on Language Teaching and Learning and Educational Materials Exhibition
4．発表年 2021年

1．発表者名 八島智子
2．発表標題 第二言語学習の情意的要因―多様な学習者と向き合うために―
3．学会等名 第28回小出記念日本語教育研究会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Yashima, T. & MacIntyre, P.
２．発表標題 Dynamic emotions underlying L2 Willingness to Communicate: Enjoyment, engagement, and anxiety.
３．学会等名 SSU3 (International conference on Situated Strategic Use 3)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 八島智子
２．発表標題 外国語学習とコミュニケーションの情意的側面
３．学会等名 2019年度関西大学外国語教育学会研究大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fukui, H. & Yashima, T.
２．発表標題 Emerging ideal multilingual selves: Narratives of Japanese students learning two languages in Taiwan.
３．学会等名 PLL3 (Psychology of Language Learning 3)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yashima, T.
２．発表標題 Researching nested systems and their interactions: Dynamic WTC in the classroom.
３．学会等名 PLL3 (Psychology of Language Learning 3)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yashima, T.
２．発表標題 L2 Motivation and willingness to communicate in a globalizing world
３．学会等名 Okinawa JALT（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 八島智子
２．発表標題 外国語情意研究の視座 ―WTC, L2 Self, & Community ―
３．学会等名 関西英語教育学会第21回卒論・修論研究発表セミナー（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yashima, T.
２．発表標題 Researching nested systems and their interactions: Dynamic WTC in the classroom
３．学会等名 Psychology for Language Learning 3（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 Gregersen, T. & Mercer, S. (Eds.). Yashima, T 他多数	４．発行年 2021年
２．出版社 Routledge.	５．総ページ数 446
３．書名 The Routledge handbook of psychology of language learning.	

1．著者名 W. Tsou & Baker(Eds.), Humphries, S. & Yashima, T. 他多数	4．発行年 2021年
2．出版社 Springer	5．総ページ数 195
3．書名 English-medium instruction translanguaging practices in Asia	

1．著者名 Yashima, T. 他著者多数	4．発行年 2021年
2．出版社 Multilingual Matters.	5．総ページ数 456
3．書名 R. J. Sampson & R. S. Pinner (Eds). Complexity perspectives on researching language learner and teacher psychology	

1．著者名 King, J. Yashima, T., Humphries, S., Aubrey, S., & Ikeda, M. 他著者多数	4．発行年 2020年
2．出版社 Multilingual Matters.	5．総ページ数 184
3．書名 J. King and S. Harumi (Eds.). East Asian perspectives on silence in English language education	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	守崎　誠一 (Morisaki Seiichi) (30347520)	関西大学・外国語学部・教授 (34416)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
カナダ	Cape Breton University			
英国	University of Leicester			